

マックス・ウェーバー著「職業としての政治 真の人間とは」日経 BP クラシックス、
日経 BP 社 2009 年 2 月 23 日刊を読む

職業としての政治 真の人間とは一

1. (1) たしかに政治は頭脳を使って行われるものですが、頭脳だけを使うというわけではありません。これについては信条倫理家の主張はまったく正しいのです。
 - (2) しかしわたしたちが信条倫理を抱く者として行動すべきなのか、それとも責任倫理を抱く者として行動すべきなのか、あるいはどのような場合に、どちらの倫理にしたがって行動すべきなのかを、誰も他人に指図することはできないのです。
 - (3) ただ次のことだけは言えるでしょう。現代はよく言われるように、「不毛」ではない興奮に動かされている時代かもしれません(興奮というものは、真の情熱ではありません。少くともあるいは真の情熱であるとは限らないのです)。
 - (4) そしてこうした時代にあって、信条倫理を抱く人々が急に増えてきて、次のような合い言葉を叫ぶとしましょう。「愚かで卑俗なのは世界であって、わたしではない。その結果の責任を負うべきなのは他人であって、わたしではない。わたしはこうした他人のために働いて、世界の愚かしさと卑俗さを根絶するつもりだ」と。
 - (5) こうした人にわたしははっきりと語るでしょう。「わたしとしては、この信条倫理の背後に、どれだけ精神的な重みがあるのかをまず問いたいのである。そして調べてみると 10 人のうちの 9 人までは、自分の負っている責任を実感しておらず、ロマンチックな情緒に酔っているだけのほら吹きだという印象をうけるのだ」と。
2. (1) わたしは、人間としてはこうした人にあまり関心をもてないのですし、いかなる感動もうけないのです。
 - (2) 反対にわたしが計り知れないほどの感動をうけるのは、結果にたいする責任を実際に、しかも心の底から感じていて、責任倫理のもとで行動する成熟した人が(若い人が高齢の人かを問いません)、あるところまで到達して〔ルターのように〕「こうするしかありません、わたしはここに立っています」と語る場合です。
 - (3) これは人間として純粋な姿勢であり、感動を呼ぶのです。なぜなら精神的に死んでいないかぎり、誰もがいつか、このような場に立たされることもありうるからです。

(4)その意味では信条倫理と責任倫理は絶対に対立するものではなく、たがいに補いあうものであり、「政治を職業とする」ことのできる真の人間を作りだすものなのです。

P152 ~ 153

[コメント]

真の情熱を持ち、精神的な重み、自分の負っている責任を実感すること。

結果に対する責任を実際に、しかも、心の底から感じて、責任倫理のもとで行動する成熟した人があるレベルにまで到達し、こうするしかないと語る。

これが、政治家としての信条倫理と責任倫理である。

東日本を襲った戦争にも似た巨大震災に対応する基本的な考え方として、このマックス・ウェーバーの政治家のあるべき姿は、すべての日本のリーダーに求められる。

- 2011年3月11日 林 明夫記 -